

親鸞の念仏における徳について

新保哲

一 和讃の解釈

ここで詠われる「和讃」の解釈の内容主旨は、大きく二種類に大別できる。一つには、過去・現在・未来の三世にわたって作る重き罪の障り、すなわち宿業輪廻の罪の滅罪の功德があげられる。たとえば一例を示すと、それは第三句の「三世の重障みなながら、かならず転じて輕微なり」に顕著に表現される。

二つには、観音・勢至菩薩があげられる。すなわちこれは二菩薩ともに阿弥陀仏の脇侍とせられており、観世音とは文字通りに読んで、世の音を観ずることの謂である。それは世間の衆生が救いを求める願いを聞くと、直ちに救済することを意味する。つまり新訳によれば観世自在の菩薩ということであるから、一切諸方の觀察と同様に衆生の救済も自在だということである。もともと一方の勢至菩薩は観世音の大悲を得て衆生に菩薩心の種子を与えるといわれる。またもう一つ

には智慧を象徴する働きを示している。

以上のような観音・勢至をはじめとし、その他数限りないいわゆる十三首にみられる「恒沙塵数の菩薩」も加わり、さらに天神・地祇もことごとく来たりして、昼夜をわかつたに護るといふ特色がある。

他方、日本の幅広い民俗信仰とむすんで現世利益のための仏教として民俗生活の奥深くにまでしみこんでいった。とはいっても、最初は何よりもまず、いわゆる貴族たちの国利民福、延命息災、病氣平癒のための仏教の色彩が濃厚であったといえよう。だからして親鸞は、当時において現世の祈禱の役割が強く呪術的性格が広く行われていたことを、いみじくも『正像末法和讃』で次のように唱っている。

かなしきかなや道俗の
良時吉日えらばしめ
天神地祇をあがめつつ
卜占祭祀をつとめとす

親鸞の念仏における徳について（新保）

また、

かなしきかなやこのごろの

和国の道俗みなともに

仏教の威儀をもととして

天地の鬼神を尊敬す

以上にみられるように、親鸞は痛く悲嘆している。

さて、親鸞は、『教行信証』「行巻」に「大経疏」上を引用して、次のように意見を開陳している。

法相の祖師、法位のいはく、諸仏はみな徳を名にほどこす。名を称するはすなはち徳を称するなり。徳、よくつみを滅し福を生ず。名もまたかくのごとし。もし仏名を信ずれば、よく善を生じ悪を滅すること、決定してうたがひなし。称名往生、これなんのまどひかあらんや。

この説示は、そのままが親鸞の言葉ではない。しかし視点を変えればそこに祖師の語句を引用することで、そのまま自己の主張を正当づけ、権威あるものとして読者に説得する意図がはたらいっていることが容易に理解できる。その意味からすると、この法位の説示は、そのまま親鸞の考えていることだということに置き直して解釈される。また、各祖師の原文の読み方に、親鸞の独特な解釈がほどこされているのは固よりであるが、そのことをふまえて、今引用した箇所を一応図式的に理解すれば、称名往生⇨称徳⇨滅悪（諸悪罪障）・生福・

生善、ということになってくる。つまり称名すれば、同時に、滅罪・滅悪や福を生じ、善を生ずることがらが形となって現われてくる。それというのも称名には念仏の功德が伴うからである。

二 滅罪の功德

念仏称名の不思議さとは、簡単にいって、「功德無量なれば、よく罪障を滅す」ということに尽きる。さらにいえることは、親鸞が今あげた引文の他、「律宗の戒度」「三論の祖師」「禅宗の飛錫」などにみられる各宗派の経文をその証拠に引き立て、そして源信の『往生要集』や、また『大乘本生心地観経』（唐の般若三蔵の訳）に説かれる六種の功德などを列記する理由の一つには、主眼が称名の勝れた数々の功德を主張することによってである。反面、翻って考えると、それが象徴的に説かれ表現される箇所においては、極めて抽象論的で、方便のみが優先しているように受け取られる面もうかがえる。たとえば学問知識のない関東の田夫野人の百姓層を対象として念仏布教することを考慮に入れると、確かに功德ということ念仏の教えを広める、数ある教便の一手段とし案出し活用した真意も察せられる。

そしてそれは、親鸞が『一念多念文意』で、「安楽浄土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめずしらざるに、信

ずる人にえしむとしるべし、となり」と叙しているように、すなわちその意味は、「安樂浄土の功德は、ことばもおよばず、説いてつくすこともえず、思いはかることもできない。しかも、それをもとめず、知らざるに信ずるひとに得しめるのだと知るがよい」という。しかも親鸞は、この最後の箇所で、如来を信じて一念すれば、必ずもとめずしてこのうえなき功德をえ、知らずして広大な利益をうる。そして自然に、たちどころにして、さまさまのさとりをひらく法則だ、と説いている。そしてさらに法則というのは、行者のはじめて考え出したことではなく、もともと不思議の利益にあずかるのが自然のことだというのを、仮に法則だというのである、といっている。つまり簡単に言い直すと、念仏の功德とは、自然の法則の如く、知らずしてもしかるべくあずかることができる、そんな性格をもっているものだというわけである。

三 功德の在り方

この功德は利益りやくという言葉に置き換えて考え捉えられないであろうか。利益は、仏教においては饒にやうやく樂とも呼び、多くの利益を与えるという意味がこめられている。それは仏の教えに従うことによつて得られる幸福・恩恵であり、自分を益することを功德、他を益することを利益というように使い分けられる。そして周知の如く、一般にこの世でうける利益を現

益、つまり現世利益と呼び、後の世でうけるものを当益、つまり後世利益と呼ぶ。

密教では、この功德のめぐみを、現世にうけるために祈禱をしたり呪文を唱えたりする。ところが、浄土教は自ずから与えられたものとし、俗に治病、延命、得財を現世利益と称している。

一方、浄土真宗においては真実信心のものが、この世に生存しながら仏となることに定まる、つまり言い換えると、『一念多念文意』中で正定聚の位に住するという表現を親鸞は使っている。それを現益、死後浄土へ生まれ成仏するのを当益というふうに一応区別している。

僧が法を一般民衆に布教し説き明かす場合、そこには必ず僧自身が長年の間身につけた知識・分別の経験的自力的要素と、また法や仏の無形なものから瞬間瞬時に目醒めさせられる、いわば恵みとしての他力的要素がある。仏教で功德といった場合、当にこの両義面に関係するというよりも、むしろ両面に根源的両義的にまたがって独自に派生してくると考えられる。それは構造的に独自体となっている。つまりそれは自力の側にも、他力の側にも功德が恵みとして降りそそがれ、それは主体的に捉えれば、極めて現世利益的な身体に即結し関係してくる問題である。たとえば、それについては病氣平癒、家内安全、延命息災、商売繁盛などがあげられる。言い

親鸞の念仏における徳について（新保）

換えればそれは人間の悩み苦しみの問題としての貧・病・争・死であり、人間の生物学的な生存にとって基本的な重みをもつ欲求であるわけだ。

しかし、また反面、客観的に捉えれば、身体にまつわる財・富、健康、出世、誕生、結婚、就職、進学などは、超越的な法の恵みの働き作用として、現象世界における現われ方をそれぞれ示し、功德の証しの様態である。したがって、それもまたそのこと自体は目的でなく「諸仏の大功德威儀尊貴^{いぎそんき}」なることを、そして「諸仏の功德無量深妙なる」ことを方便として、煩惱具足の凡夫の五感を通して確実に訴えるものであるといえよう。もちろんその基本前提には、「諸仏を念ずるに無量の功德います」ことを信受する態度があるからである。

以上を整理してみると、貧・病・争・死などの危難からの脱却する道・方法としての現世利益的な恵み功德と、死後の地獄からの脱却としての魂の救済的な意味における来世観的な恵み功德、人間の自力的な功德の施し積み方と還相的な恵み功德の給わり方、聖と俗、宗教的理解と個人的公共的利益の理解、その他いろいろな二次元的世界における功德がある。

それに関連し、ここで往相廻向と還相廻向について触れたい。すなわち自分の善行功德を他のものに廻らして、他のも

の功德とし、ともに浄土に往生しようと願うことを往相廻向という。そしてそのような浄土往生を可能にする功德はわれわれの衆生の諸善奉行によるものではなく、阿弥陀如来の安楽浄土に生まれさせられるとする教義があるから、すべて阿弥陀仏の力によると解し、阿弥陀仏の廻向された他力によつて往生することができるとするのが、真宗の説く意味である。また一方、浄土に往生したものが再びこの世に生まれ、衆生の救いのための教化を垂れることを還相廻向と呼び称している。いずれにしろ、この世に生まれて教化する力も、先と同様、実は阿弥陀仏の他力によると解釈するのが真宗の教えである。以上のように、功德を恵み（大悲）とすると、与える恵みには二種類のすがたがあり（相）、仮にそれを今説いてきた如く一つには往相、二つには還相と呼んで理解しているわけである。

さて、親鸞は、「信巻」において「金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道をこえ、かならず現生に十種の益をう」と説き、真実の信心を獲た者はこの世において十の利益を受けるとして、以下の十の徳目をあげている。

なにものかをとする。ひとつには冥衆護持^{みやうしゅごじ}の益、ふたつには至徳具足の益、みつには転悪成善の益、よつには諸仏護念の益、いっつには諸仏称讃の益、むつには心光常護の益、ななつには心多歡喜の益、やつには知恩報徳の益、ここのつには常行大悲の益、

とをには入正定聚の益なり。

すなわち現代語に置き換えて言い直せば、次の十項目を意味する。一つには、眼に見えない天地の神々に護られるという利益。二つには、この上もない勝れた徳が身に具わるという利益。三つには、悪を転じて善とすることができるという利益。四つには、さまざまな仏に護られるという利益。五つには、さまざまな仏から称讃されるという利益。六つには、阿弥陀仏の光に収めとられて、常に護られるという利益。七つには、心に多くの喜びがえられるという利益。八つには、如来のご恩を知って、その徳に報ずることができるという利益。九つには、如来の広大な慈悲を常に行うことができるという利益。十には、浄土に生まれて、仏になることが約束された人たち（正定聚）の中にはいるという利益。実はこれらの数多くの功德は、仏号尊号を「一心」「一念」「専心」「専念」に自己の全身全霊をもって、阿弥陀仏の願をたより、称名往生を信じ、一声乃至は多声することによって与えられるというのである。他方、親鸞が「化身土巻」において、元照律師の『阿弥陀経義疏』にいわくとして、次のように引挙し記す理由も、念仏功德の廣大無量で計り知れないことを説き明かさんがためである。

如来持名の功すぐれたることをあかさんとす。まづ全善を貶^{へん}して少善とす。いはゆる布施・持戒・立寺・造像・礼誦・座禪・懺念・

親鸞の念仏における徳について（新保）

苦行・一切福業、もし正信なければ、廻向願求するにみな少善とす。往生の因にあらず。もしこの経によりて名号を執持せば、決定して往生せん。すなはちしんぬ、称名はこれ多善根福德なり。むかしこのさとりをなしし、ひと、なを遲疑^{ちぎ}しき。ちかく襄陽の石碑の経の本文をえて、理、冥符せり。はじめて深信をいだく。かれにいはいはく、「善男子善女人、阿弥陀仏をとくをききて、一心にしてみだれず、名号を専称せよ、称名をもてのゆへに諸罪消滅す。すなはちこれ多功德多善根多福德因縁なり」と。

親鸞は、『阿弥陀経義疏』の原文引用にたいしてその三倍の解釈・説明を文頭から試み、最後に結びとして本文を掲げている。

一方、名号を称えることによる真実功德の現われは、親鸞が宝海にたとえて、それを「よろづの衆生をきはらず、さわりなく、へだてず、みちびきたまふを、大海のみづのへだてなきにたとへたまへるなり」と『一念多念文意』に開陳している通りである。しかしさらに親鸞の教えは徹底して、五逆十悪を犯すいわば出離の縁なき者にも仏号を与える行為には、功德そして往生が約束されていることを説くのである。もちろんそれは中国の唐代初期浄土教大成者の曇鸞やその思想的影響をうけた浄土教開拓者の道綽、善導などの經典註釈や著書の引用を以って、自己の説く念仏往生の論証にしたこととはいうまでもない。

ところで、親鸞は端的に念仏の功德の勝れていることを「も

親鸞の念仏における徳について（新保）

しよくつねに念仏三昧を修すれば、現在過去未来の一切諸障をとふことなくみなのおくなり」とか「もし阿弥陀仏を称すること一声するに、すなはちよく八十億劫の生死の重罪を除滅す」、または「もし修しやすく証しやすきは、まことに浄土の教門なり」とか「こたえてはいはく、みな称すればつみ消滅す、たとへば明燈の闇中にいるがごとし」や「まことにしりぬ、『経』にときて「煩惱のこほりとけて功德のみづとなる」といへるがごとし」等と数々の説き明かし方を、『教行信証』中に試みている。以上の意味をくみ取って言い換えると、功德とはまた本願力が成就した姿、現われとして捉えることも可能である。

四 功德の象徴的表現

次に念仏の功德には、どのような形容、概念、意味がつけられ、また象徴的表現で説かれているのかをその考察の対象としてみたい。まずは『教行信証』の各巻いたる所、全体にわたって散見できる。

一つは、眞実功德という表現である。たとえば『一念多念文意』においては、「眞実功德ともうすは名号なり」という言い方となつて捉えられている。

二つには、不可思議光仏の功德という表現である。これは親鸞の著述『弥陀如来名号徳』の中で、「無称光とまふすは、

これもこの不可思議光仏の功德はときつくしがたしと、釈尊のたまへり」という言い方になつて記されている。ここで、いちいち各功德と「徳」の文字を書き付けたには、それなりの意図があり、つまり名号を称えるとき、念仏者が仏の計りがたいもろもろの恩恵功德を授かることを、特に強調したかったからであろうと推察される。そしてここで用いる不可思議光仏と功德とを結びつける（の）の運用・働きは、根本的理解に照らして、仏のもつ具足同参する、または仏と不離一体となつて自らそなわっているという概念としての解釈が、そこに隠されているといえる。こういう例は「行巻」にもみられ、仏に本源的に所属・帰属する性格のものとして、すなわち功德とは念仏信心の結果として仏から与えられたものという解釈に容易に置き換えられる。それを、親鸞の「念仏三昧の功德、不可思議なるをあらはさんとなり」という最も確かな文章表現に読み取れる。では一体その不可思議性の具体的な証明とは何か。それは、一例をあげると、一切の煩惱、一切の諸障、一切の悪神ことごとくが断滅されるということに尽き、それに授かれる恵みを得ることが、とりもなおさず功德だというのである。

三つには、無量功德という表現である。たとえばこれは、「無量功德を念ずれば」とか「諸仏の功德無量深妙なるをちゅうりょう籌量（よくおしはかつて）して、よく信受する」という言い方になつ

て記されている。考察すると、無量が功德を語意修飾しても、また逆に功德が無量という概念を修飾・形容しても、そこにはいずれも根本は一体の有機的存在関係として構造成立していることを意味している。

四つには、莊嚴功德という表現である。たとえばこれは、『釈迦牟尼仏、王舎城をよび舎衛国にましまして、大衆のなかにして、無量寿仏の莊嚴功德をときたまふ。すなわち、仏の名号をもて経の体とす』の一文にうかがえる。

五つには、親鸞は功德の在り様を、海的大海原・大洋にたとえて功德大宝海と表現している。たとえば、『浄土文類聚鈔』の「正信念仏偈」の箇所の一文中において、「功德の大宝海に帰入すれば、かならず大会衆のかずにいることをう」(「行巻」末文と同じ)と親鸞は述べ、そこであらゆる功德に満ちた宝の海というイメージの世界を、象徴的に語っていることが理解される。また、さらには「誓願不思議一実真如海」(「行巻」)、「真如一実の功德宝海」(同上)、「光明の広海」(同上)、「難思の法海」(「化身土巻」)、「不可思議の徳海」(同上)、「真実功德の大宝海」(『入出二門偈』)、「功德の宝海」(「高僧和讃」)、「功德のうしほ」(同上)、「弘誓の智海」(同上)などの数々の表現が示される。いずれも、これらのことばの表現は、念仏本願の世界はさとりの世界であり、あらゆる功德を具えている点を説いている。言い換えると、名号の功德が信ずる人の身

に満ち、名号にはもろもろの功德が具わっていることを、海にたとえて教え示している。

ではその原因は何であったであろうか。親鸞が本願の世界を「海」と捉えた引き金は、『大無量寿経』(東方偈のうち)の一句と世親の『浄土論』、および曇鸞の『浄土論註』の中の解釈文等によってであろうと考察される。しかし翻って、それを親鸞独自の念仏の世界に展開していった最大原因は、京都から越後流罪になった彼が、最初に直江津の居多ヶ浜に上陸したことから起因している。つまり、そこでは四季の海の景色が千変万化の景観を見せる。特に冬は厳しく、日本海の幾日も続く鉛色の空そして白波立った荒海は、親鸞の身と心の底深くにまで刻み込まれていったに違いない。要はそのような自己体験から生まれてきた思想であろう。同時に、それは内に照らし省察すれば、自己や越後の百姓農民はもとより、人間そのものに常にまといつく煩悩の諸相諸念であった。また一方、本願の世界を仰げば、それは広大無量な阿弥陀仏の恵みの姿に受け止められた。

〈キーワード〉 念仏功德、現生十種の益、滅罪功德、功德無量

(文化女子大学教授・博士(文学))